

アカシア夜話 アカシアンナイト
第8話

昭和40年代までのアカシア会は、組織は未成熟で事務局もなく、名簿の作成等も自前でできないような状況でした。

今回は、その頃を知る田中昭男先生に昨年の初夏にお会いし、アカシア会成立のころの裏話を伺ってきました。

創立60周年記念式典

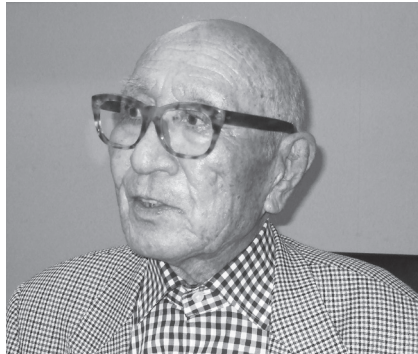
創立60周年記念いうのを昭和40年(1965年)にやとるんです。昔の記念式典は講堂で校長が話をして、それでアカシア会の代表とPTAの代表が話をして、開校記念日の歌を歌うて、はあ、それでお終いじゃったんですよ。

それへ行った連中が、藤居平一(24回)さんらを中心にして、「こんなあ、時々集まって、色々話をしようじゃないか」というのが、月例アカシア懇談会の始まりじゃから。確か、昭和42年4月17日に始めとると思うんじゃ。それから月例アカシア会報はちょっと遅れて、昭和49年3月から発行しとる。これは、懇談会の機関紙として、附属のOBが結束していく為には、そういう機関紙も出したがええんじゃないかという事じゃった。これを頑張って作ったのが、松林孝昭(42回)、増田尚雄(43回)の若手二人です。これは、名簿と月例アカシア懇談会の会報を印刷するのに終始頑張った。松林君は特に、川妻(二郎・36回)さんの補佐という形じゃったんじゃがね。この二人の6年差が今もって引き継がれて、上下の幹事になっとる。

それで話をしていくうちに、これは創立70周年を盛り上げて、わしらが一つ計画してやろうじゃないかと。アカシア会でやろうということになった。それで、皆で相談をして、学校へ来んさったのが昭和49年の12月じゃ。藤居平一さんが川妻さんを伴うて来んさったのよ。わしは校長室におったんじゃが、やれやれ大事になるで思うての…。その年の4月から野地(潤家・昭49.4～53.3)さんが校長。菊地(勇・昭19.4～56.3)さんが副校長じゃった。中学校の副校長が高田(平八郎・昭17.4～52.4)さんだった。それにわしともう一人誰かが、とにかく校長室におったんですよ。そしたらね、来たんよ、平一さんが川妻さんを伴うての。

「相談があるが、ええかいの」というような調子で、前かがみで入ってきたよ。そしたら野地校長が「どうぞ、どうぞ」言うて。「ほうか、アカシア会をわしは代表して来たんじゃ。今日は、ひとつ協議をしたいことがあるので、よろしく頼む」と。それで最初に言われたのが、「70

周年の記念式典並びに記念事業を、アカシア会が独自でやりたい。まずその点について協力してくれるか、協力してくれるか。そこをはっきり返事を承りたい」と。その時に野地校長が、全面的に協力しますと、こうやったんです。今日の、学校とアカシア会の強い協力関係が、できあがったのはこれからなんよね。



田中昭男先生、平成23年6月18日

母校とアカシア会の関係

というのは、それまではアカシア会と学校は、ええ関係じゃなかったんよ。そこを校長が協力しましょう言うんで、それで終わった思うたんよ。ところが、その後が長いんじゃ。平一さんがやりだしたんよ。「この機会じゃから、わしは積年の学校に対する不満をぶちまけて言うけえ、よう聞いてくれ」と。やれやれ、これは来たわいと思うたんよ。

たとえば「学校は、学校を運営していくのに、教員の顔がPTAのほうへ向いとるんじゃないか」と。「アカシア会のほうは無視して、もっぱらPTAに依存している」と。これが現状じゃないかと。

そしたら、それは困るわの。現実にはそうじゃったんじゃから。それには経緯があって、加藤誠蔵(31回)さんのお父さんの加藤悦蔵さんというのがね、終戦直後の父兄団の団長だったんですよ。わしはもう耳にタコができるほど聞かされたんじゃけえ、加藤さんのおかげで校舎が復興したんじゃと。南側の校舎、北側の校舎、真ん中の校舎、と木造の校舎が3棟あった。

加藤悦蔵さんは材木屋さんじゃった。材木を集めてね、そして国やなんか金なんか出しゃあせんじゃけえ。金のない時代に。それはもう父兄団に頼るしかない。大学は文句を言うたぐらいですよ。附属は勝手に校舎を建ててから、どうじゃこうじゃ言われた。じゃが加藤さんは、父兄団の力で復興をせにやいけんと。一日も早く東千田の昔の附属中学校があったところへ校舎を建てて、仮の校舎

P r o f i l e

昭和2年1月6日広島市五日市町生まれ、20年10月海軍兵学校卒業(75期)、24年3月広島文理大学卒業、同年4月から52年11月まで広大附属中・高等学校教員、52年11月愛媛大学教授、平成元年4月広島県立大学教授、8年3月退職、平成23年9月2日ご逝去

でええから建てて、子ども達がここで勉強できるようにしたいというのが、加藤さんの信念じゃった。国は、本来、国立大学の附属でしょう。予算を出すべき責任がある。そがあなヒマ、ありゃあせんですよ、あの当時、昭和20年代いうたら。だから勢い、なんでもかんでも、父兄団(後のPTA)に頼ることになるんですよ、経済的に。国から出る金いうのはわずかだ。じゃからしょうがない。学校は金を作って運営していかにやいけんのじゃから。PTAに依存するんですよ。

それで「PTAに依存して、なんでもPTAに相談をしてやとるんじゃないか」と。こう平一さんから叱られるのも無理もない。

それで、「おっしゃることはよくわかります」と。決して同窓会としてのアカシア会を無視しとるわけじゃありませんが、今の経済事情から言うと、国立大学でありながら金がない状況だから、どうしてもPTAに依存する。PTAは金を出しますから、というような話だった。それで平一さんに言わしゃあ、なんぼ金を出しても、この子ども達が学校を卒業したら、PTAは関係ない。学校と関係なくなる。しかし、アカシア会は違うんだと。同窓会なんだから、これはもう終生、卒業したら同窓会。そこらは考えにやあいいんじゃないか、というようなこと。そういうような話があつてね。これは筋は通つとるんです、ちゃんと。じゃから、こっちは嫌じゃとは一つも言わなんだ。それは違いますとは言われんじゃない。

他にもなんぼかありましたよ。その中の、たとえば、具体的にアカシア会に協力的でないことの一つとして、アカシア会の会員名簿を作るのに、附属の先生が手伝ったことがあるかと、こうなった。これを作るのにね、それまでは3年に1ぺん出しよった。その頃、三浦泰生君(39回・国語S31.4～S52.3)とか片山一法君(42回・数学S38.4～H6.3)ら、附属のOBで学校の先生をしよったのが中心となつて、同窓会が手伝って作りよった。他の先生らは手伝わんでのお。これがね、ぜんぜん役に立たん。

ところが平一さんに言わしゃあ、生徒がどこの大学へ入ったか。大学を卒業してどこへ行つたか、一番知つとるのは、情報をよう知つとるのは先生じゃないか。先生がアカシア会の会員名簿を作る

のに、素知らぬ顔をすると何事かと怒られたよ。

それから、アカシア会が学校と話し合いをするときに、どこが窓口が分からんんじゃないか、というような話がその時にあったんですよ。そんなことが、この話し合いで一挙に解決した。

創立70周年記念事業(使える名簿を作れ!)

それから、アカシア会は70周年記念事業を計画した。永野重雄(9回・元日本商工会議所会頭)さんとか、櫻田武(12回・元日経連会頭)さんやらの協力を得てね。それを平一さんがやりだした。あれやろう、これやろういうことでね。わしはそばで見とったけれどもね、すごい、思うてね。まあ、いけんと思うたら一喝じゃけえ。鶴の一声いうのは、まさにこれじゃと。



藤居平一氏 昭和57年月例アカシア懇談会にて

それで昭和50年(1975年)になって、学校の運営機構を抜本的に改革しようということになって。その時に、総務部いうのを作ったんです。それまでの教務部いうのが、ちょっと負担が大きすぎるから、総務部を作って従事させようと。総務部がアカシア会の窓口として仕事をすると、いう事も決まって、そういう運営機構を改革したんです。その初代の総務部長になったのが、わしなんだ。

総務部は、70周年の記念事業の全部の窓口じゃから、それを明文化してあるわけですよ。「アカシア会に関する事」というのが、総務部の仕事の中に。

それから平一さん、川妻さん、それから松林君とか増田君とかいうのと心安くなったわけですよ。そして総務部の部屋がないんで、校長室の横にちょっと部屋が空いた。その狭い部屋じゃけど、ここを総務部にするということで、アカシア会が机を持ち込んだ。平一さんが、「おい、事務机を入れえ」というようなことで、「電話を引け」言うて、電話を引いて。それから職員を確か2人おいたと思うんじゃが。それでうても総務部の者が4、5人おるのに、それへアカシア会の事務机を入れて、アカシア会の電話を入れて、女の子を2人。ここにアカシア会会員名簿、創立70周年記念号いろ

うがあるでしょう、これを作れと。これは平一さんの命令じゃ。

今までの会員名簿はダメじゃ、なんの役にも立たんと。役に立つ、本当の意味の会員名簿を作れというて作ったのが、これですよ。これが現在の、いわゆるアカシア会と学校との強力な関係を作ったきっかけでね。これで苦労したんです。

常任幹事の藤居平一さん、佐々木博文(29回)、川妻二郎、片山一法、松林孝昭、増田尚雄、これらが中心になってやった。学校側は菊地さんとわしじゃ。これを12月までに出せ、言われたんじゃけ。これはね、本当に大変な仕事じゃったんじゃけえ。最初、これを一つ作ったらね、あとはみやすいんですよ。あとは右へならへでいきゃあええんでね。今のような、こういう立派なものができとりますけれども。これの元になったのは、これじゃけえ。じゃけえわしには、これは大きな仕事じゃった。

平一さんにはよ一ヶえ頼まれたけど、褒めてもらえたのはこれだけじゃ。

高級官僚を励ます会

昭和51年に、高級官僚を励ます会というのを築地の河庄とかいう料亭でやるとるんですよ。平一さんが「田中君、お前ついてこい」言うて、こうじゃけえ。わしはカバン持ちでの。それで「ええか、賀茂鶴2本、それからもみじ饅頭1箱持って行け」。そう言われて、別に金を預かった訳でもなんでもないのよ。それで、わしは土産を持たされての、汽車に乗って。「ここへ座れ」言われて。東京へ着くまで、ずっと説教じゃ。どうじゃ、こうじゃあ、とのおっ。

それで賀茂鶴ともみじ饅頭をさげて、井内(慶次郎、32回)さんの所へ行っったんじゃけ。当時、学校関係者で井内さんいうたら、天皇陛下みたいな人じゃった。文部事務次官じゃけえ。それで、「田中君、ええか、こういう所へ来ての、これはお土産ですというようなことを言うもんじゃないの。ええか、部屋があるけえの、部屋の入り口にドアがある。そのドアの所へ黙って置いとくんじゃ。酒を2本、それともみじ饅頭を持ってきたのを



河庄で受付をする田中先生(左)と増田氏

黙って置いとけ。そしたらわかるんじゃ。井内さんはちゃんと、これは持ってきたのいうのが。それで、なんにも言うな。平一さんに、そういうとこまで教えてもらうたですな。

感謝

しかし、わしは平一さんには本当に感謝しとるんです。まあ村田(可朗、8回、当時のアカシア会会長)さんとか、原(幸夫、17回、当時の幹事長)さんも立派じゃったよ。立派じゃったから、原さんの言うことには、平一さんも逆らえなんだんじゃけど。

創立90年の時に、記念祝賀会の会場へ行っったんよ。そしたら、増田君がおつてね。「ああ、先生、来られる思うて待ちました。藤居平一さんが来ておられます」言うて、平一さんのとこへ連れて行ってくれたの。それで、「藤居先輩、久しぶりですね、お元気ですか」いうてわしが言うたん。そしたら、わしの顔をじーっと見ての、それからしばらく、こうして見て。それで「田中君じゃないか。元気でやっとなるか」いうて言われたですよ。それでその時に、はあ昔の面影が無いの、思うた。もう、大粒の涙が出るばかりですよ。なんにも、もう無い。あとは、手を握っての。その翌年、逝去されたんじゃけえね。

じゃからわしはね、本当、現在の立派なアカシア会の基盤は、あの先輩達が苦労して作ったと。まあ、そう言っちゃなんじゃけれど。アカシア会と学校、学校が大きな顔をして、月例アカシア懇談会に招かれて行って、話ができたりするのね、実はやっぱり、そういう関係に持って行った苦労が有るんだということを、忘れてもろうちゃ困ると。わしが言いたいのは、そこですよ。

編集にあたって

昨年の春、是非、お話を伺いたいと、インタビューを申込み、6月18日にお会いしました。

用意した昼食にはほとんど箸をつけられませんでした。銚子1本を空けられるほどお元気で、顔色も良かったので、先生が抗癌治療を受けておられると聞いてはおりましたが、その時がお会いできる最後になろうとは、予想だにしていませんでした。

ここに掲載できたのはほんの一部ですが、亡き田中先生のお話をお伝えする役目を負わせていただいた事は、教え子の一人として、僅かながらも恩返しになったかと感謝しています。

文責・編集：甲斐 稔(63回)

編集補：河本良子(63回)